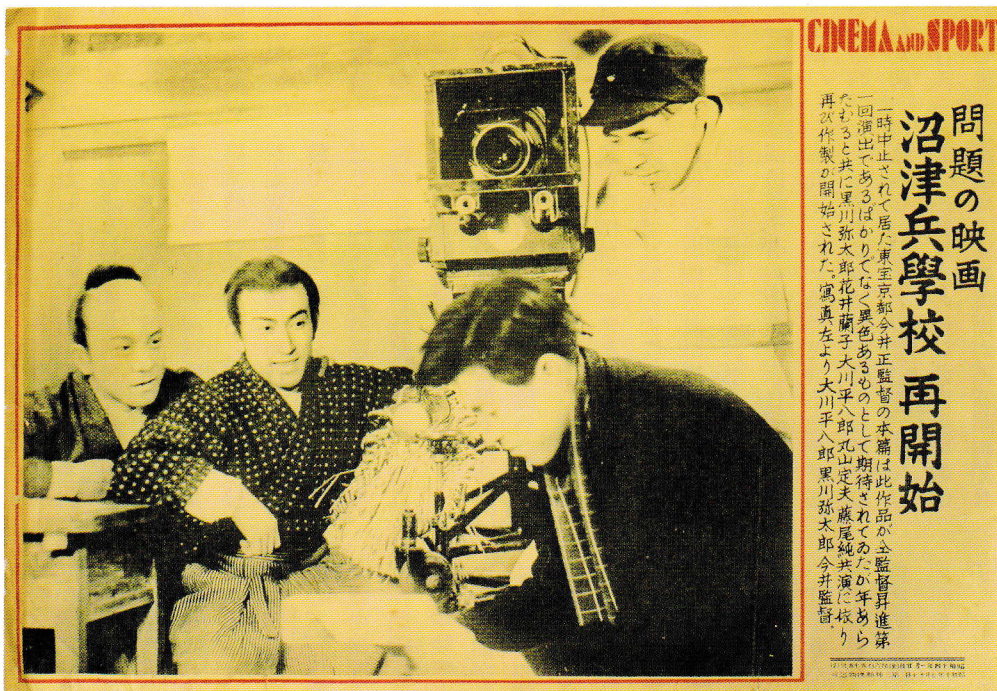


沼津市

明治史料館通信

2007.10.25 (季刊 年4回発行) Vol. 23 No. 3 通巻第91号



映画「沼津兵学校」の撮影進行を報じる写真ニュース (当館所蔵)

シリーズ
沼津兵学校とその人材

◇82◇

映画「沼津兵学校」のこと

二六歳の若き今井正の監督処女作である映画「沼津兵学校」(昭和一四年、東宝映画、白黒・八一分)は、沼津兵学校の二人の生徒、長州藩から来た千倉俊平と旧幕臣出身の栗野正邦との確執と和解の過程を描いた、青春モノである。決して戦争礼賛の国策映画でない。脚本は片桐勝男・八木隆一郎の二人。八木は秋田県生まれで、青森県五所川原で文学に目覚め上京、左翼運動の経験もあった。

監督今井も、戦後は「青い山脈」「ひめゆりの塔」をはじめ、民主主義を謳歌し社会正義を訴える作品を次々に発表した人であり、左翼思想の持ち主であった。今井は初めてメガホンを取るにあたり、撮影所長から「沼津兵学校」と「札幌農学校」のどちらかを選べと指示され、沼津兵学校のほうを選んだのだという(市原正恵「今井正監督の手紙―処女作『沼津兵学校』をめぐる一』『静岡の文化』第四七号、一九九六年)。今井は後年、この作品について、アマチュアの作品のようで恥ずかしかったと回想している(『今井正「全仕事」―スクリーンのある人生―』一九九〇年)。なお、八木隆一郎作「沼津兵学校」は、映画と同じ昭和一四年二月、新橋演舞場において新国劇としても初上演されている。

軍国主義を直接的に助長するものではなかったとしても、映画「沼津兵学校」が制作された背景とし

ては、以下に引用するような解釈も成り立つ。「日本人同士には敵も味方もない。薩長と幕府は真の敵同士ではなく単に見解の相違で対立しただけであり、どっちも誠実に日本を憂えたのだ、真の敵は外国だ、という考え方に役立ったからである」(佐藤忠男「映画にみる敗者の復権」『太陽』第一七〇号・特集悲劇の明治維新、一九七七年、平凡社)。この作品も戦争という時代の制約から無縁ではありえなかつたといえよう。

千倉を演じた黒川弥太郎(一九一〇〜八四)は、戦後は大映・東映の時代劇に多数主演し、テレビにも進出した。栗野役の大川平八郎(一九〇五〜七二)は、戦後もアメリカ映画「戦場にかける橋」に助監督兼俳優として参加するなど、やはり活躍を続けた。一方、頭取の西尾周三(西周がモデル)を演じた丸山定夫(一九〇一〜四五)は、広島原爆で死亡した悲劇の俳優として知られる。

しかし、筆者のようなテレビ世代に馴染みがある出演俳優は、花沢徳衛(一九一一〜二〇〇一)だ

けである。ただし、全くのちよい役であった。花沢は、自分の名前が初めてポスターに印刷された作品として映画「沼津兵学校」を以下のように回顧した。「私の役というのは、講武所風の鬘を結った旗本の子弟の役で、試験を受けて落第する。見せ場としては、そのシーンだけ。後は何百人という人数で、そろそろ歩くだけだから、どこに出ているのかわかりはしない。」(花沢徳衛『脇役誕生』、一九九五年、岩波書店)。

さて、映画の内容であるが、時代考証として、史実と比べてみた時、たとえば以下のような諸点に注意を払っておきたい。

① 入学試験の面接で、安禄山とは何かと質問され、中国の山の名前であると答える受験者。これは、篠田敏造著『増補幕末百話』(一九九二年)等に乗っている逸話であり、脚本執筆には同書が参照されたい。

② 授業風景の中に西洋人の教師が教えている場面がある。沼津兵学校はもちろん、静岡藩にもお雇い外国人は存在しなかったので、

このシーンは誤りである。アメリカ人クラークが静岡学問所に赴任したのは廃藩後のことである。

③ 大砲の発射訓練をしている場面。シナリオ(一九三九年発行『映画評論』第二巻第二号に掲載)では、これがアームストロング砲であるとなっている。愛鷹山で発射訓練をするとの布達が残っているのも、沼津兵学校に大砲があったことは間違いないが、その種類は不明である。

④ 生徒たちが揃いの軍服を着ている場面があるが、実際には制服はなく、訓練の時なども和洋まじまちで各人各様の服装をしていた。

⑤ 明治新政府の兵部大輔大村益

次郎が視察に訪れる場面。このことを記した文献もあるが、実際は大村が沼津兵学校を訪問した事実は史料上確認できない。

⑥ 生徒たちが寮の食堂を打ち壊す場面。これは後世の旧制高等学校での賄征伐のようすを描いたものであり、実際にパンカラの気風はあったものの時代設定が違う。

⑦ 廃校にあたり、引率教官が訓示を与え、生徒たちが沼津を去っていく最後のシーン。実際は、明治五年五月東京へ向かった資生堂六三名は、教官の引率ではなく、生徒の中から選ばれた責任者が指揮官となり行軍、上京した。

(樋口雄彦)

江原素六とその周辺<46>

池谷福太郎塾と昌平黌

江原素六は八歳のとき初めて、習字を教わるため新宿上町の中根倉之助塾に入った。その塾は、立地から娼妓や貸座敷・引手茶屋の子女などが多く通う、いわば下層庶民を対象とした寺子屋であった。次いで三年後の嘉永五年(一八五

二)五月に入塾したのが池谷福太郎の塾である。右は『江原素六先生伝』(一九二三年)の記述にもとづくものであるが、江原自筆の履歴書(江原文書M13「履歴書一」)では、安政元年四月に池谷福五郎に就いて習字・漢文を学んだと記

されてお、入塾時期が食い違っている上、師の名前も違う。時期についてはどちらが正しいのか判断がつかないが、後掲史料にもある通り名前は福太郎が正しい。

江原は、池谷塾には大小を帯び袴を着けた生徒がいることに驚いたという。唯一同窓の塾生で判明しているのは、中沢中(善三郎保信、明治二十三年三月三日七三歳没)という幕臣である。このことは、中の息子で、旧幕臣の親睦団体同方会の幹事をつとめ、会長江原を補佐した中沢金一郎の手紙が根拠である。明治末年に江原宛に送られたその手紙によれば、金一郎の父は池谷の門人であり、また母親も教え子であったという(『江原素六先生伝』上篇六三頁)。ただし、中沢中は江原よりも二〇歳以上年長であり、少々腑に落ちない。そうなるに師の池谷はかなりの年配だったことになる。

いずれにせよ、池谷は江原にとって「忘れ得ぬ恩人」となった。江原の才能に気付き、読み書きのみならず高度な漢籍の素読を勉強するよう勧め、学問の必要性を全

く理解しない父源吾を説得してくれたのが池谷とその妻だったのである。江原の妹ます子も池谷塾に通い夫人から糸繰りなどを習ったという(『急がば廻れ』)。

池谷は江原に昌平黌の素読吟味を受けることを勧めた。そして安政三年(一八五六)九月二一日、一五歳の江原は同吟味を受験し、乙科に及第、丹後編二反を拝領したとされる。この点に関しても文献・史料によって多少の食い違いがある。江原の回想録『急がば廻れ』では、褒美の丹後編は三反となっている。昌平黌素読吟味の成績優秀者への褒美は、御目見以上の場合、甲科は丹後編三反、乙科は二反、御目見以下は、甲科銀三枚、乙科二枚と規定されていた。江原家は旗本なので、丹後編を賜ったわけであるが、『先生伝』が記すように乙科及第であれば、三反ではなく二反が正しい。

なお、安政三年の昌平黌素読吟味は一〇月二一日、二三日、二五日に行われ、一五名が受験したという記録が残っており(橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』

一九九三年、風間書房、八五頁)、『先生伝』や自筆履歴の九月という記述は誤りである可能性が高い。同年江原が元服する際、周甫という実名と花押を贈ったのも池谷であった。

ところで、池谷福太郎に関して、幕臣であること以外、その素性は不明であった。しかし、以下に掲げる、幕府の人事を伝える安政五年(一八五八)七月二九日付の記事から、その本来の所属や、後に学問所すなわち昌平黌に出仕した事実などが判明した。

表御台所頭支配無役

学問所勤番 池谷福太郎
右被仰付旨、於焼火之間、若年寄中出座、本庄安芸守申渡之。

(『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第八卷、一九九〇年、三二書房、一六九頁)

ただし、その後の消息は不明だ。素読吟味は基礎課程修了の区切りともいべきものであり、昌平黌では次の段階として学問吟味があった。しかし、江原はそれに挑戦することはなかった。漢学を深めることよりも、武官として砲術

や蘭学を学ぶ選択をしたからである。ただし、しばらくの間昌平黌に通学したこともあった。以下に掲げる史料がそれを裏付ける。

一 江原涛三郎・根本鋆三郎初而出席二付面会致す

(橋本昭彦編『昌平坂学問所日記Ⅲ』一〇〇六年、財団法人斯文会、二五四頁)

これは安政四年(一八五七)三月一日の記事であり、江原が学問所での講義に初めて出席したことを示している。「涛」は「鋆」の誤記か誤読であろう。

また、同じ年(自筆履歴では安政五年)に寛政三年(一七九一)

創設の昌平黌の分校、麴町教授所(麴溪書院・麴溪精舎)へ入門した事実もある。そこでの師は松平謹次郎(慎斎、文化二年六月二二日生まれ、文久三年七月五日没)

であった。松平門下からは江原以外にも秋月悌次郎・林惟純・瀧村小太郎らの人材が輩出した。明治四五年(一九一二)東京谷中の菩提寺で催された松平の五十回忌には江原も参列している(『鶴鳴遺稿』一九一八年)。(樋口雄彦)

お知らせ欄

◎「アノ頃キミハ若クッタ」 昭和の沼津写真展」の実施

昭和期の当館所蔵写真や戸田地区で発見された写真など、初公開の写真を中心に約100点を展示しました。会期中の毎週土曜日にギャラリートークを実施しました。会期中多数の方にご観覧いただきました。ありがとうございました。ありがとうございました。

◎夏休み企画の実施

平和を考える戦争史跡めぐりは親子対象（8月10日(金)実施）に28



中学生の戦争史跡巡りの様子(8月7日実施)

海軍高角砲部隊のトーチカにて(中沢田 砲台公園)



すいとんの味は？

名が参加し、東京都立戦時疎開学園(我入道)で生活した当時の児童20名が現地地で体験談を話してくれました。中学生対象(8月7日(火)実施)には23名が参加しました。小学生歴史教室「戦時中のくらしを体験しよう」には小学4〜6年生30名が参加しました。渡辺蒼子さん、菊地和子さんに戦時中の体験談をお話していただき、戦時中の食事としてすいとんを作って食べました。また、今回も金岡婦人学級有志10名にボランティアとして協力していただきました。ありがとうございました。

「高校生のための一日学芸員体験講座」(8月8日(水)実施)には6名が参加しました。講義「博物館と学芸員」と実際に資料に触れることを通して、博物館の学芸員という仕事を体験しました。

◎博物館実習の実施

8月29日(水)〜9月9日(日)の日程で、学芸員資格の取得を目指す学生6名が実習を行いました。

◎古文书解読入門講座の実施

初めて古文书に触れる人を対象に、武田藤男氏(前当館嘱託)が講師を務め、9〜10月に5回にわたって開催しました。17名が受講し、くずし字の解読に取り組みました。引き続き自主講座に参加して、古文书の解読に取り組んでいく受講者もいます。

◎企画展「牧堰・門池用水と水の恵みと人々のくらし」開催中

技能五輪国際大会の開催にちなんで、牧堰・門池用水の沿革を紹介する企画展を開催しています。会期 9月22日(土)〜11月25日(日) 企画展関連事業として歴史講演会、史跡めぐりを開催しました。多数のご参加ありがとうございました。

〈歴史講演会〉
日時 10月1日(土)13時〜15時
演題 「牧堰門池用水の沿革」
講師 四方一澄氏
参加者 72名

〈史跡巡り〉
日時 10月20日(土)9時〜12時
主な見学地
門池碑・配水塔・門池導水路取水口・牧堰・本宿用水上堰・地震窪・用水分岐点・石樋など(約7キロメートル)
参加者 27名

沼津市明治史料館通信 第91号
編集 沼津市明治史料館
発行 沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二一
電話 〇五五-九二二-三三三五
FAX 〇五五-九二二-三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm